

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

ピーター・バラカン ブロードキャスター
Peter Barakan / Broadcaster



CREATOR INTERVIEW ^{No} 74

ピーター・バラカン Peter Barakan

ブロードキャスター。1951年ロンドン生まれ。ロンドン大学日本語学科を卒業後、1974年に音楽出版社の著作権業務に就くため来日。現在フリーのブロードキャスターとして活動、「バラカン・ビート」(インターFM)、「ウィークエンド・サンシャイン」(NHK-FM)、「ライフスタイル・ミュージアム」(東京FM)、「ジャパノロジー・プラス」(NHK BS1)などを担当。著書に『ロックの英詞を読む～世界を変える歌』(集英社インターナショナル)、『ラジオのこちら側で』(岩波新書)、『わが青春のサウンドトラック』(光文社文庫)、『ピーター・バラカン音楽日記』(集英社インターナショナル)、『猿はマンキ、お金はマニ』(NHK出版)、『魂(ソウル)のゆくえ』(アルテスパブリッシング)、『ロックの英詞を読む』(集英社インターナショナル)、『ぼくが愛するロック 名盤240』(講談社+α文庫)、『200CD ブラック・ミュージック』(学研)などがある。 <http://peterbarakan.net>

No.74 ピーター・バラカン ブロードキャスター

Peter Barakan / Broadcaster

クリエイターインタビュー

『六本木と東京、そして音楽とメディアの行方』



バー&レストラン、ライブ・ハウスと映画館を併設した“カルチャーセンター”を六本木に。

photo_tsukao / text_kentaro inoue

1974 年に来日、音楽業界をへて、DJ やブロードキャスターとして活躍。ラジオ番組や著作、音楽イベントなどを通じて、良質な音楽を届け続けるピーター・バラカンさん。かつて六本木で働き、現在も毎週のようにこの街を訪れるというバラカンさんに、六本木の今と昔、さらに音楽とメディアの未来についてうかがいました。

80 年代前半は、東京で一番雰囲気の良い場所だった。

もう 9 年間くらい六本木でラジオ番組をやっているし、それ以外にも「ビルボードライブ東京」や「EX THEATER ROPPONGI」でライブを観たり、美術館に来たり。そもそも僕は昔、YMO の事務所に務めていて、80 年代前半は乃木坂に事務所があったので、この界限には毎日通っていました。

ライブ・ハウス「インクスティック」なんかがあって、今の東京ミッドタウンの向かい側、龍土町界限がすごく活気づいていた頃の話。82~83 年の六本木は、東京の中でも一番雰囲気の良いところでした。「六本木 WAVE」もあったし、クラブ文化と言ったらいいのかな、本当に画期的な街だったんですね。今はレコード店は流行らないけれど、国立新美術館があったり、21_21 DESIGN SIGHT があったり、そういう意味では、今も昔も文化面はしっかりしている街だと思います。

東京ミッドタウンができたおかげで、“こっち側”はすごくかっこよくなったし、品もよくなりました。でも、向こう側には怪しげな雰囲気が続いていて……。交差点を境にミッドタウン側

と反対側が、まるっきり別々の街、2つの相容れないものが同居している雰囲気があるんですよ。だから、未来の六本木をよくするためには、"あっち側"をなんとかしないといけない(笑)。



**Tokyo Midtown presents
The Lifestyle MUSEUM**

バラカン氏がメインパーソナリティーを務めるラジオ番組。毎回さまざまなゲストを迎え、その生き方や価値観を探っていく。TOKYO FMで、毎週金曜 18:30～19:00 放送中。写真は、アイデア実現プロジェクト#03で箭内道彦氏が出演したときの様子。

東京には、食も音楽も楽しめる大人のクラブがない。

それはともかく、僕が一番得意とする音楽の分野でいえば、大人が気楽に楽しめるクラブが、六本木あるいは東京のどこかにできてほしいと思っているんです。そのモデルとして僕の頭の中にあるのは、アムステルダムにある「ビムハウス」というジャズクラブ。

入ると右側がバーとレストラン、左側がライブスペース、ホールは半円形で、下りていくと一番下に演奏スペースがある。だから見やすいし、音もわりといい。食べたり飲んだりしたい人は右に行けばいいし、ライブと食事の両方を楽しみたい人は早めに行って、食事をしてからライブスペースに移ってもいい。

音楽に集中したいときって、食べている音が余計なときがあるんですね。ビルボードライブ東京にしてもブルーノートにしても、コットンクラブにしても、日本のクラブってどこも、食べるスペースと音楽を聴くスペースが一緒になっていて、両方が別々に楽しめるところがなかなかない。アムステルダムに行ったときに、これだ！って思っ



ビルボードライブ東京

東京ミッドタウンガーデンテラス 4Fにあるクラブ&レストラン。一流シェフによるコース料理をはじめフードやドリンクを楽しみながら、国内外さまざまなアーティストのライブが鑑賞できる。フロアは3層吹き抜けで、ステージ後方に広がる夜景も美しい。

気軽に音楽が楽しめる大衆的なバー&クラブもない。

もうひとつ東京には、いい意味で場末っぽいバー兼クラブもないんですよ。つい先日、ニューオーリンズに行ったときに訪れた「メイプルリーフ」という店は、左側に長いバーがあって、

壁をへだてて右にライブスペースがあるんです。つながってはいるんですけど、やっぱり別々。ビムハウスとはまた違う、大衆的な雰囲気ですごくよかったです。

東京だと、どうしてもおしゃれ感を出してしまいがちだけど、そうじゃなくて本当に気軽に、安い料金を音楽を楽しむ空間がひとつくらいあったらいい。たとえば、横浜にある「サムズアップ」という店は、まさにアメリカの南部のような雰囲気。高円寺とか新宿にもそういうライブハウスはあるんだけど、どこも狭いんですね。東京は家賃が高いから、難しいのかもしれないけど。

ちなみに、ビムハウスは外を見ると運河が流れていて、その眺めもなかなかよくて。たとえば天王洲の寺田倉庫あたりに、そういうクラブができたらいいなあ って、いつの間にか六本木の話じゃなくなっちゃいましたけど（笑）。



photo_tsukao / text_kentaro inoue

日本人でもイギリス人でもなく、ロンドン人。

よく「バラカンさんは日本人なんですか？」って聞かれるのですが、自分のアイデンティティを国家にダブらせたことはありません。大学を出た 1 年後からずっと東京に住んでいるけれど日本人ではないし、かといってイギリス人でもない。しいて言えばロンドン人。だって今年の夏、初めてリヴァプールに行ったくらいで、イギリスっていったってロンドン以外ほとんど知らないんですから（笑）。

とはいえ、42年も住んでいますから、基本的には東京が好きなんだと思います。でも住んでいると、いい面も悪い面も全部見えてくるもので……。

たとえば、僕が好きなのは、銀座から日本橋にかけての中央通り。道もまっすぐで、きれいにビルが並んでいて、本当に都会らしい感じがする。あとは浅草とか、ざっくばらんな雰囲気の下町も好き。もちろん街そのものもいいなと感じる場所もあるけれど、下町ってとにかく人がいいですよ。

東京は冷たい？ ロンドンは温かい？

NHK ワールドで「Japanology Plus」という番組をやっていて、いろんなところ取材に行くことがあります。昨日も、町屋にある何十年も同じお菓子をつくっている町工場を取材したんですけど、ものすごく人がよくて。最近電車なんかに乗っていると、東京の人はみんなストレスにやられて温かみがないと感じることが多いんですが、ときどき下町に行くと、もっと人間らしくやってるなという印象を受けます。その人間らしさを、六本木あたりにも取り戻す方法はないものかな。

今は住んでないからなんとも言えないけど、ロンドンも、もうちょっと温かみがあるんじゃないかって思うんです。ロンドンの中心部はわりとまとまっていて、歩いて回れるんですよ。東京は中心部がもっと広くて、42年間暮らしていても、まだまだ行ったことのないところがたくさん。みなさんだって、山手線で下りたことのない駅、けっこうあるでしょう？

なにより、東京はとにかく人が多い。ついこの前、番組のファンの人から「東京に行くから会えないか？」って連絡がきて、新宿駅の近くで待ち合わせたら、案の定迷っちゃって。僕も40年前、日本に来たばかりの頃まったく同じように新宿駅で迷ったことがあって、パニックに陥りましたから（笑）



Japanology Plus

富士山からラーメンまで、多面的な日本の魅力を世界に発信するテレビ番組。バラカン氏が、毎回さまざまな分野の専門家を訪ね、日本の伝統芸能や自然、食や技術などを紹介している。NHK BS1で、毎週火曜日 3:00 ~ 3:28 放送中。

地に足がついていなくて、流されてしまう街。

東京ってメディアに振り回されがちで、地に足が着いてない感じがありますよね。ロンドンとの一番の違いは、もしかするとそういうところかもしれない。ときどき宙に浮いてるといって、流されてしまっていると感じるときがあるんです。

世界を見てみると、今年はイギリスのEU離脱とか、トランプの大統領就任とか、まさかの事態が続いていますが、どちらも大都会にいない人たちの不満というか閉塞感が爆発したような動きですよ。これから、日本や東京はいったいどうなってしまうんでしょうね。



photo_tsukao / text_kentaro inoue

音楽を「人と一緒に」聴くことが気持ちいい。

僕はときどき、DJ イベントというか、ほとんどラジオ番組を人前でやるようなイベント (A Taste of Music) をするんですが、不思議と人が来てくれるんですね。なぜ集まってくるかという、おそらくいい音楽をいいオーディオ装置で「人と一緒に」聴くことが気持ちいいんじゃないかな、と思っています。

ひとりでぽつんとコンピューターに向かって楽しむこともできるけど、それだけだと満足できないときがある。もっと人と共有したい、これはたぶん人間の本能的なもの。

CD が売れなくなって、配信に移行していくというのは世界的な流れで、日本でも間違いなくそうになっていくでしょう。今の世の中の理にかなっているし、現実を嘆いても仕方ないから、それはそれでいいと思います。ただ、なんでもコンピューターの画面で済ませてしまうのはちょっとつまらない。

アナログレコードやアルバムが新しいという感覚。

音楽の聴き方も変わりましたよね。たとえば、昔はアルバム単位だったのが、今は曲単位。媒体が LP から CD に変わった時点で、アルバムとしての価値は崩れはじめたと僕は思うんですよ。LP は、A 面 B 面がそれぞれ 20 分くらい。そもそも、人間の集中力はちょうどそのくらいが妥当なんじゃないか、とも感じるし。

片面 20 分を構成することは、まだやりやすいんですが、CD のように 1 時間を構成することってけっこう難しいんです。しかも CD の場合、この曲はいいやと思ったら簡単に飛ばせる。す

ると、構成することに果たして意味があるのか、という話になってしまう。もう CD が登場してから三十数年もたっているから、アルバムとして聞かないというのは仕方のない結果かな、という気がします。

一方で最近、アナログレコードの人气が復活していますよね。もしかして、そういうものを聞いたことのない世代の人たちにとっては、レコード、あるいはアルバムという形で音楽を聞くのが新しいと感じるのかもしれませんが。



A Taste of Music

時間をかけてチューニングされたハイエンド・オーディオで、バラカン氏おすすめの音楽が楽しめる DJ イベント。ウェブマガジン「A Taste of Music」のイベント版として定期的に開催され、多くの音楽ファンが集まる。

<http://www.a-taste-of-music.jp/>

非日常的が味わえる "カルチャーセンター" をつくりたい。

さっき話したようなバーとレストラン、そしてライブ・ハウス、プラス映画館。それらがひとつの施設に入ったカルチャー・センターのような施設がもしあったら、面白いような気がします。ライブにしても映画にしても、意識的に非日常的な要素に触れることが大事なんじゃないかな、と。

僕が大学時代によく通っていた、ロンドンにある「ナショナル・フィルム・シアター」という施設では、いろんな時代の映画がいつもかかっていました。会員制だけど、すごく会費が安くて。京橋の「フィルムセンター」(東京国立近代美術館 フィルムセンター) が似ているけれど、あれはまさしく国がやってるから、ちょっとお堅い。

Netflix みたいなものもいいけれど、映画ってやっぱり暗闇の中でそれなりに大きい画面で見て、音もよくて、他の人と一緒に体験してこそ心に残ると思うんですね。そういう施設があったら、ライブと映画で共通のテーマを持った特集企画を組んだり、いろんな可能性が広がっていく。それを六本木のような都心でやることに意味はあると思います。

メディアと受け手の間に、信頼関係がなくなってしまった。

今、一般社会でも経済格差がすごく問題になっているじゃないですか。音楽の世界も同じように、ものすごく売れるアーティストがほんの少しかけて、他の 99% は無名に近い。99% は少し大げさかもしれないけど、そういう格差がすごく広がってきていて、メディアに取り上げられるのは 1 パーセントの部分だけになりがち。

メディアも商売だからわかるんだけど、でも結局、それが自分の首を絞める形になっている。

本当に悪循環になっていてとても残念ですけど……。一番の問題は、メディアと受け手の間で、だんだんと信頼関係が持てなくなったことでしょうね。

メディアも、レコード会社も、何もかもが商業主義的な考えになって、量産されたポップミュージックが主流になっている。これは日本に限らず、世界中でそう。だから個人的には、売れるとか売れないとか、話題性があるとか、知名度があるとか、そういうことを一切気にせずに、自分が価値があると思う音楽を電波に乗せる。それから、ライブの情報をできるだけ紹介することを心がけています。

多様な音楽を上手に伝えられるメディアの必要性。

トランプが大統領に選ばれたとき、ジョン・オリヴァーというコメディアンが「メディアは番犬としての役割をしっかりと果たさなきゃダメだ」と話していました。当たり前といえば当たり前ですけど、メディアには、行きすぎがないようにしっかり監視する義務があるんですね。政治の世界に限らず、情報を伝達するメディアのあり方が今、すごく課題になっていると思うんです。これは僕もメディアに携わるひとりの人間として、いつも意識していること。

たとえば東京では、毎日いろんなライブが行われていますよね。能動的に興味を持って見に行こうという人にとっては、もちろんそういう機会はたくさんあるでしょう。でも、潜在的な興味はあるのに知らないで終わってしまった、という人はすごく多いと思うんです。僕ですら「えっ！ こんな人が来てたの」ということがよくあるくらい。

もちろんウェブにすべての情報はあるんですけど、どうやって探したらいいかわからない。メディアがもうちょっと多様な音楽を上手に伝えられないかな、と。六本木未来会議が、このエリアのデザインとアートの情報を紹介しているように、音楽の世界でもそういう試みができたら面白いですね。



港区立檜町公園

東京ミッドタウンの東側に隣接する区立公園。かつては長州藩・毛利家の下屋敷があり、その庭は江戸の町並みを一望できる名園として知られていた。地名は、まわりに檜の木が多く、「檜屋敷」と呼ばれていたことに由来する。

取材を終えて……

メイン写真の撮影は、紅葉が見頃を迎えた東京ミッドタウンの横にある港区立檜町公園で。撮影中、ファンの方から「Are you Peter Barakan？」と声をかけられ、笑顔で握手に応じる一幕もありました。(editor_kentaro inoue)